

5 金堀り場の遺跡

聖通寺山の北端、海に面した北浦の部落、その山鼻のかけ下に、戦時中の防空壕をおもわすような深い洞窟がある。

この洞窟は海波の侵食による自然のものではない。だれが見ても明らかにさく岩のあとのある人工の坑道で、坑口から奥へは、およそ十四・五メートルはあるうか。物すごく硬いペクマタイト（鬼みかげ）の岩盤を故意に打ち抜いて奥につづいている。内部は暗いが、勇気を鼓してはいつて見ると、足もとはいささか心もとないが、大の男が二人立ち並んで歩行出来るだけの広さである。

ところで、北浦の人々は古くからこの穴を金堀り場と呼んでいる。それはこの坑道が古い鉱石採掘の遺跡であることを物語っているからである。

実は今から三百十数年前、初代高松藩主松平頼重公（水戸光圀の兄）の時である。この聖通寺山に銀鉱のあることを発見して掘らせたのが、今に残っている北浦の

坑道で、藩に残された頼重公の「英公実録」を見ると、この坑道が掘られたのは承応三年（一六五四）であるとあり、「この年銀を山に掘る。：日月は不詳なれども、銀山は石田（大川郡）及び宇多津にあり：」と記述されている。この宇多津は聖通寺山の金掘り場をさしていることも自から明らかであろう。

してみると、聖通寺山は、高松藩が少なくとも銀の出る山として、その採掘に力を入れたこともわかるであろう。

しかし、今に残る坑道の遺構から見ると、その期待も思わしくなく、間もなく廃坑にした形跡は十分に読みとれるのである。

いずれにしても、江戸時代の初期、聖通寺山が銀山として騒がれたことは確かで、そしてその遺跡がほかでもないこの北浦の金掘り場なのだが、土地の古老もその古い伝承は既に忘却している。

「そうですねア、古くから金掘りの場のあつたことは聞いているが、お殿様時代の話は存じません。黒い羽織をいつも着込んだ坂出の人、それがこの金掘り場

にやつてきて、よく指図していたのを覚えている。何でも、焼くと青い火の出る蛍石というものをここで掘り出し、それを船に積んで回漕していたのは子供心に記憶がある。もう五十年も前になりますかなア。その後、戦時中でしたか宇多津の某氏が、やたらにこの山には金があるんだ銀がでるのだと言って、山中を探索していたこともあります…」などと、近々の見聞を物語ってくれるだけであつた。

ちなみにこの坑道の上、今のセンターの北西にあたるところにも坑道がうがたれている。これも金掘り場の遺跡である。